



アトリエ・ワン / 筑波大学 講師

貝島 桃代

ADUKUST 佃島の再生

1969年 東京都生まれ
 1991年 日本女子大学住居学科卒
 1992年 塚本由晴とアトリエ・ワン設立
 1994年 東京工業大学大学院修士過程修了
 1996年~97年 スイス連邦工科大学奨学生
 2000年 東京工業大学大学院博士課程修了、修士
 2005年~07年 スイス連邦工科大学客員教授
 現在 筑波大学専任講師

——当時、どんなことに興味がありましたか？

街や都市空間に関心がありました。また外国や日本の建築を見て回るのが好きだったので、よく旅行をしました。どちらかといえば、一つの都市に長期滞在する旅行が好きでした。そのとき、卒業後どこかへ行こうかと思いながら、海外の大学も見に行きました。そこで、同世代の学生や建築家が活動していることにも影響を受けました。自分の学んでいる建築や都市が、日本や世界のなかで一体どんなものなのかというのを比較しながら自分なりにつかもうとしていたところでした。

——では、卒業設計のコンセプトはどのようなものでしたか？

皆さん、佃島には行ったことありますか？行ってみると、とても面白い場所です。古い昔の江戸時代の骨格がまだそのまま残っていて、神社で今でもお祭りが行われていたり、細い路地があったり、運河が島の周りを取り巻いています。けれども、川の対岸には、バブルの影響で大きな高層ビルが建ち始めていた。私の大学生の時期は、バブルの最も華やかな時期でした。大きなプロジェクトによって建物が次々と建てられる中、自分はどちらにいたんだろうと、将来も含めて、設計の立ち位置を模索している中で設計していたと記憶しています。なので最初は随分悩みました。つまり町の活動があるのにも関わらず、それが大規模開発などの経済的プレッシャーの前で、風前の灯のように見えました。江戸文化にノスタルジーを感じていたのではなくて、人々の自由な活動が別の力で吹き飛ばされてしまいそうになる、その事実に対する大きな疑問と憤りを覚えていたんだと思います。だから、それらをなんとか延命できる措置はないのかと、それを持続できる方法はないか



卒業設計 模型写真

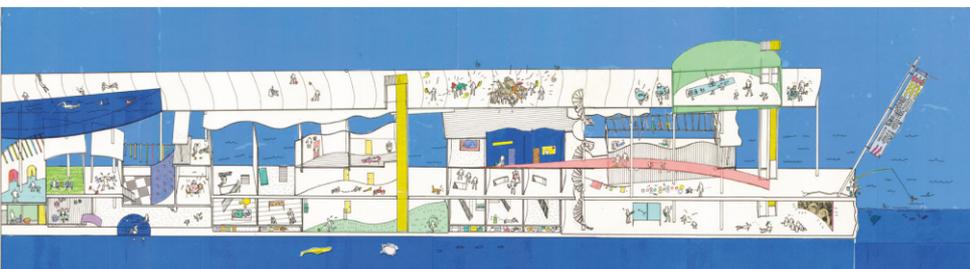
なというのが私の思いでした。それで散々悩んだ上、東京は地価が高いからそういったことが起きることに気づいて、土地に建築が依存していることが問題なんじゃないかなと考えました。そこで、土地から離れているけれども、その場所は占有できる建築が出来ないかと思った時に、佃島を全部船として短冊状に切ることを思いついたのです。それらが海の上に浮かんでいけば、その場所にはあるけれども、土地から切り離され、自由になる上に、さらに船の空間を組み合わせれば彼ら自身が独自の生活や都市空間をつくることのできるのではないかと思いました。私自身はその土地を切るということに関しては荒唐無稽のように聞こえるかもしれないけれど、建築的な前例はあるのです。そういったプロジェクトも参考にしつつ設計したので、自分としては全く違和感なく、むしろかなりのリアリティを持って設計していたと思います。

——学生に一言お願いします。

とにかく、なんでも思いっきりやることです。思いっきりやれば、だめであっても、達成感が残って、悔いは残らない。あとは、よく人と話したり、聞いたりすることはいいと思います。それから良い仲間をたくさんつくることです。わたしにも同級生の仲間が、自分の学校以外にも、沢山いました。外の人の話を聞けば聞くほど、自分のやっていることがわかってきます。また話すということも十分表現です。好きな



建築や何か見たことについて話し合っ、自分が思っていることを伝えてみる。もちろん、文章や建築そのものとして表現することもあると思いますが、なんにせよ、自分の考えていることを表現することで、外側から良かれ、悪かれ、さまざまな意見や反応をもらうことは、表現の楽しさや嬉しさ、悔しさにもなって、次の自分の力になります。わたしはそういうことをして、ものをつくるエネルギーを蓄えていったような気がしています。



卒業設計 パース

図版提供/貝島 桃代

インタビュー: 東京電機大学 田辺 俊策 / 玉尾 祐輝 / 鶴崎 有